

環境心理学			単位数	履修方法	配当年次
			2	R or SR	2年以上
科目コード	FC3504	担当教員	柴田 理瑛		



※この科目は、2018年度まで開講します。スクーリング受講、レポート提出、科目修了試験受験は2018年度まで可能です。

※履修登録は2017年11月20日まで可能です。

※この科目の会場スクーリングは2017年度が最終開講です。2018年度は開講いたしません。

※オンデマンド・スクーリングは2017・2018年度開講予定です。

■科目の内容

「環境心理学」は「心理学」の研究分野の一つです。「心理学」の大きな目的の一つは人間理解にあるのですが、「環境心理学」はとくに、ヒトと環境とのさまざまなかかわりのあり方を通して人間を理解するといってもよいでしょう。よく“人は人によって人となる”などといわれますが、これは人と人的環境、もっと大きくとらえれば人と社会的環境とのかかわりについて述べたものです。また私たちは、毎日の生活を快適にするために、部屋のインテリア、採光、温度などに配慮します。これは物理的環境に手を加えていることになります。街の景観や都市計画、産業地帯の整備などは、はるかに規模の大きいものになるわけです。それによって私たちは快適感や満足感を味わうことができる一方で、目的や方法が身勝手に、環境への配慮の足りないものであれば、環境を汚染し取り返しのつかない破壊を地球に残してしまうことにもなります。

この科目では、人間の成長発達に及ぼす環境の影響や、快適環境作りなど、基礎と応用の両面にわたって勉強しながら、一方では破壊、他方では保全といった、相反する行動を行う人間の心の世界をも考えてみたいと思います。

■到達目標

- 1) 環境心理学の代表的な研究について内容を説明できる。
- 2) 環境心理学の応用的な研究について内容を説明できる。

■教科書

岩田紀編著『快適環境の社会心理学』ナカニシヤ出版、2001年

回数		学習内容・キーワード	学びのポイント
1	環境―人間行動 への関心 (1章)	環境の定義や環境心理学の起源について学ぶことで、環境心理学の特徴を理解する。 キーワード：人間と環境の関係、個人決定観、環境決定観、相互作用観、覚醒理論、人間―環境システム論	学習心理学と他領域の研究視点の違いを理解し、特色を説明できるようにしましょう。学習心理学における様々な理論の変遷について理解しておく、後の学びにおいて、研究者が提唱する理論やモデルが「なぜ」「どのように」変化したのかについての理解が容易になるでしょう。
2	都市環境と人間 ① (2章2.1-2.3)	都市の定義や特質について学びながら、都市の快適性と過密の人に対する影響を理解する。 キーワード：都市の特質、都市化の進行、都市的行動様式、都市の快適性、クラウドイング	都市のもつ特質について触れながら、都市の快適性や、都市の抱える問題について自分なりに整理しましょう。また、人口密度が高いことが必ずしもクラウドイングを生起させない理由について考察してみましょう。
3	都市環境と人間 ② (2章2.4-2.5)	様々な環境刺激が人間の行動に及ぼす影響および都市と都市に居住する人々の社会行動との関係について学ぶ。 キーワード：騒音、刺激過剰負荷、都市と犯罪、都市と援助行動、都市と人間関係	ここでは都市環境の快適性について、騒音や都市の気象といった物理的な環境刺激だけでなく、犯罪や援助行動といった人間関係が都市の快適性に及ぼす影響について考察してみましょう。
4	自然環境と人間 (3章)	自然環境の特徴について学び、自然環境と人間のかかわりについて理解する。 キーワード：自然環境、景観評価の精神物理学のモデル、景観評価の心理学的モデル、ストレスからの回復	自然という単語の定義を通して、改めて自然の意味を考えてみましょう。また、自然環境と人間に関する研究に触れながら、自然は人にとってどのような価値があるのかについて自分なりに考察してみましょう。
5	住宅環境と居住性① (4章4.1-4.3)	居住環境の快適性にかかわる諸要因について学び、動線を考慮した平面計画について理解する。 キーワード：快適性、住宅の機能、平面計画	住宅の快適性や機能性を規定する要因について物理的側面と心理的側面から整理してみましょう。また、住宅内における人の行動を考慮した平面計画について、自分の家と比較検討してみましょう。
6	住宅環境と居住性② (4章4.4-4.6)	住宅内部の安全性やインテリアのデザイン計画について学び、環境心理学を活かした住宅計画について理解する。 キーワード：安全性、インテリアのデザイン計画、様式、住宅計画	住宅内部の安全性、デザイン性について学びながら、住宅環境の快適性について理解しましょう。また、環境心理学的な知見が住宅計画にどのような影響を与えているのかについて考察してみると良いでしょう。
7	超高層集合住宅 (5章)	超高層住宅が居住者の心理的行動的側面に及ぼす影響について学ぶ。 キーワード：超高層住宅、住環境ストレス度、子供の自立の遅れ、子供の遊び、妊産婦に与える影響、防犯性	本章では、超高層住宅が居住者の心理的・行動的側面について、建築学、住居学、保健学といった観点から学びます。超高層住宅ならではの特徴や問題について考察してみましょう。

回数		学習内容・キーワード	学びのポイント
8	オフィス環境の 快適性① (6章6.1-6.4)	オフィス環境に関する研究を学びながら、オフィスが抱える問題やオフィスの生産性を規定する要因について理解する。 キーワード：居住後評価、開放感、生産性	本章では、これまでのオフィス環境に関する研究やその手法（POE、SD法など）を学びながら、どのような要因がオフィス環境の快適性に寄与しているのかについて理解しましょう。また、オフィスの快適性と生産性について自分なりに考察してみましょう。
9	オフィス環境の 快適性② (6章6.5-6.6)	オフィスの快適性と個人スペースの関係を学び、未来型のオフィスについて学ぶ。 キーワード：個人スペース、プライバシー、オープンプラン・オフィス、バーチャル・オフィス	本章では、オフィスの快適性について物理的な要因だけではなく、心理的な要因の重要性について学びます。特に、オフィスにおける個人スペースの広さが快適性に与える影響を自分なりに考察してみましょう。
10	学校環境の快適 性① (7章7.1-7.2)	環境心理学的アプローチの観点から、学校環境の快適性について学ぶ。 キーワード：動的な環境体験、居場所性、相互交流、ふれあい空間、行動セッティング	学校とは、知識獲得の場だけではなく、多様な日常生活を送る場でもあります。このような学校の快適性には、活動にふさわしい機能だけでなく、その活動を支える雰囲気や仲間との相互交流について配慮する必要があることを理解しましょう。
11	学校環境の快適 性② (7章7.3-7.4)	キャンパス空間の快適性やデザインプロセスについて、実践例を通してながら、快適な学校環境のデザインには何が必要かを学ぶ。 キーワード：キャンパス空間、物理的環境因子、組織的環境因子、仲間関係因子、生活の質、コミュニティ・デザイン	快適なキャンパスの条件には、多様な行動セッティングの整備といった物理的環境の整備だけでなく、学生や教員の好みなどの心理面についても配慮する必要があることを理解しましょう。また、キャンパス内部だけではなく、周辺部の環境についても包括的にデザインすることの意義について考察してみましょう。
12	地域環境と快適 性 (8章)	地域環境と快適性について、主に物理的環境を対象とし、よりよい環境を創出するための方法を学ぶ。 キーワード：国民生活指標、新国民生活指標、ISM法、評価関数モデル、整備水準と満足度、施設の配置と満足度、効率性と公平性	本章では、住居やオフィス、学校などの建物の内部環境ではなく、建物の外部環境について学びます。地域の快適性を評価するには、どのようなアプローチがあるのか、どのような要因が地域の快適性を規定するのかについて理解を深めましょう。
13	地球環境と人間 (9章)	地球規模の環境問題について触れながら、問題の構造とその解決方法について学ぶ。 キーワード：共有地の悲劇、グローバル・チェンジ、エーリッヒの方程式、環境ハザード、リスク知覚、社会的ジレンマ、行動的介入	地球規模で生じる環境問題は、人間生活の快適性を最大限向上させようとしてきたことが1つの原因と考えられています。個々人が生活の快適性を最大限追求するのではなく、皆が協調し適度な快適性を維持するためにはどうすればよいか、自分なりに考察してみましょう。

回数		学習内容・キーワード	学びのポイント
14	環境保全と環境教育 (10章)	国際的な比較を通して、日本における環境教育のあり方と環境保全について学ぶ。 キーワード：ユネスコ、UNEP、ストックホルム会議、ベオグラード憲章、トビリシ会議、モスクワ会議、ボランティア活動、公害、環境倫理	環境問題の解決における環境教育の果たす役割について、国際的な取り組みの変遷と日本における取り組みを学びましょう。また、このような国際比較を通して、日本における環境教育の実践とそのあり方について、どのような要因が重要な役割を担っているかについて考察してみましょう。
15	環境保全の実践 (11章)	環境社会心理学の観点から、環境保全の実践に関連する諸問題について学ぶ。 キーワード：環境配慮行動、リスク認知、責任帰属の認知、対処有効性の認知、段階的要請法、役割演技法、社会規範評価、便益費用評価、実効可能性評価、アクション・プログラム	環境に配慮した行動を実行するまでの意思決定プロセスと、その行動を規定する要因を整理しましょう。また、環境配慮行動を引き出すためにはどのようなアプローチがあるのかについて考察してみましょう。

■レポート課題

1 単位め	職場環境あるいは居住環境のどちらかを選び、その機能性、快適性、安全性について、具体例をあげながら、望ましい環境条件について論じなさい。
2 単位め	地球温暖化はなぜ起こるのか、その原因と考えられる人間の心理と行動について説明し、地球環境を守るために私たちが今行わなければならないことは何かを論じなさい。 ※スクーリング受講者専用「別レポート」対象課題・web解答可

※提出されたレポートは添削指導を行い返却します。

■アドバイス

私たちの日々の生活で最も身近な「家」あるいは「職場」環境の機能性、快適性、安全性と、私たち人間の環境破壊によるさまざまな環境問題について考えてもらいます。どちらもきわめて日常的かつ重要な問題ですので、日ごろの自分の考えを生かしながら、具体的で現実味のあるアイデアを述べてください。解決策は意外と身近なところにあるものです。

■2つの課題に共通する留意点

1. レポート全体の構成

レポート全体の構成について注意深く考えてみましょう。大きくは、導入・議論・結論の3部構成にし、それぞれ順に15%、70%、15%くらいの割合にするとバランスが良くなるでしょう。

2. 「段落」、「一文」についての意識を高める

その段落で読み手に伝えたいことは何でしょうか？ 読み手に何を伝えたいのか、段落ごとに意識しながら書きましょう。また、次の段落につなげるときには、段落間のつながりがスムーズで無理のないものかを考えてみましょう。そのようにして一つひとつの段落を積み上げていくつもりで全体を

書いてみましょう。同様に、一つひとつの文章間のつながりも、なめらかで強引なところはないか見直し、文章単位でも推敲を重ねてください。主語と述語が一致しない文章がないか、長すぎる文章がないかをチェックしてみてください。(レポートでの「です・ます」調、体言止めなどはふさわしくありませんので使用しないように。)

3. 参考文献・引用文献について

引用文献とは、その中の文言を引用した文献です。その文献の著者・出版年・タイトル・出版社をレポートの最後に明記しなくてはなりません。本文中に、例えば、「広瀬(2008)は…」や「…である(広瀬, 2008)」などと表記した場合には引用文献となりますので、その原典を引用文献として記載してください。テキスト中で紹介されている研究をレポートに引用する場合、テキストを参考文献として挙げるだけでは不十分です。レポート本文で上述のような表記〔(広瀬, 2008) など〕をするなら引用文献として扱ってください。原典は参考にした図書(章)の最後にまとめられていますので、そのままの形式で記載してください。一方、参考文献とは、レポートを書く上で漠然と参考になったという文献です。これも最後に参考文献として著者、出版年、タイトル、出版社の情報を挙げてください。

4. パソコン印字の場合、本文は明朝体にしてください。

1 単位め アドバイス

テキスト第4章「住宅環境と居住性」、第5章「超高層集合住宅」、あるいは第6章「オフィス環境の快適性」をよく読んでください。それらの知識を参考にしながら、今お勤めの職場環境、あるいは今お住まいの居住環境(建物そのものと立地条件など)を、どのように改善したら機能性、快適性、安全性の点から見てよりよい環境になるかを論じてください。

なお論述に当たっては、プライバシーの観点から判断して、許される範囲で結構です。よりくわしいアドバイスは下記のとおりです。

1. 概念の定義

職場環境か住居環境のどちらかを選び、その環境における機能性、快適性、安全性とは何か、3概念それぞれについて、自分はどのような意味でこの言葉を用いるかを述べてください。その際、「○○性とは…のことである」などの文章を使うとよいでしょう。

論じようとする概念を定義することは、自分が何について述べようとしているのか、自分が論じるのはどの範囲なのかを読者に伝えることです。何について述べようとしているのかを最初に読者に示すことによって、レポートの書き手と読み手が同じことについて考えられるようになります。例えば、「快適性」とは何のことでしょうか? 身体的な心地よさを指しているのか、精神的なそれを指しているのか、両方なのか、あるいはもっと別なものを指しているのか、さまざまな解釈があり得ます。書き手と読み手が同じ事象について考えることができるよう、概念を定義する必要があるのです。

2. 定義した範囲内におさまる具体例

定義ができたら、自分が定義した範囲内に収まる具体例を示すようにしましょう。その際、定義と具体例の一貫性を保つよう心がけましょう。そうすることによって、脱線することなく議論することができ、読者に説得力をもって働きかけることができます。

3. 最後にまとめの段落をつくりましょう

住居環境（職場環境）の機能性、快適性、安全性についてそれぞれ論じ終えたら、最後にまとめの段落を作ってレポート全体を締めくくるようにしましょう。今まで論じてきたことをまとめ、どのような住居環境（職場環境）が理想とされるのかについて、自分の考えをまとめるようにしてください。

2単位め アドバイス

テキストのパートⅢ「地球環境の保全」を参考にしてください。環境を汚染し、破壊するような結果をもたらした人間行動の多くは、おもに経済的価値を第一とする考え方に根ざしており、それに政治的価値重視の考えが重なるとその規模も極端に大きくなる傾向にあります。改善のためには、いろいろな機会を利用した啓蒙と、一人ひとりが、面倒がらずに保全のための努力を地道に継続するしかありません。自分の日々の生活を振り返り、地球市民の一員としての責任を果たすためにも、ぜひ改めて考え、実行してみてください。よりくわしいアドバイスは下記のとおりです。

1. 地球温暖化による異変

地球温暖化による異変について、砂漠化や温暖化など、ご自身の関心のあるものでよいので、1～2つ位のトピックスに絞って具体的に紹介してください。実際のデータや数値などを示しながら、客観的に書きましょう。

2. 地球温暖化

温暖化がなぜ生じたのか、その原因を考えて書いてみましょう。その際、温暖化を導いた人々の心理的原因とそれによって引き出される行動的原因に注目してみましょう。

3. 原因を取り除く具体的行動と、それを促進する具体的アプローチは？

原因まで記述できたら、その原因を取り除くために我々ができることを具体的に書くとよいでしょう。その際、どのような心理学の知見や考え方がそれを促進することができるのかを調べて紹介してください。環境問題の難しさは、環境破壊を抑制する日常的な行動（例えばエコバックや公共交通機関の利用など）が大切であるという人々の認識は十分にあるのに、実際にはそれをあまり行わないところにあります。どのような心理学的知見を活用すれば、こうした問題を少しでも解決できると思いますか？その際、テキストにある専門用語を単に並べて述べるのではなく、その専門用語が何の何を意味していて、それがどのように課題の解決に役立つのかを自分の言葉で述べましょう。この分野を初めて学ぶ人にも分かるように心がけて書くと良いレポートになると思います。大いに自分の考えを述べてください。

レポートの一番の目的は、課題についてさまざまな資料や文献を調べ、調べたことをもとに自分が「何を」「どう考えたのか」を読み手に分かりやすく伝えることです。自分の考えや主張を段取りよく相手に説明することは日常生活でも重要なスキルだと思います。レポート作成を通して、ぜひこのスキルを身につけていただけたらと思います。がんばってください。

※この科目は「TFUオンデマンド」上で、担当教員によるレポート・アドバイスの動画を視聴することができます。

■科目修了試験 評価基準

試験100%で評価します。具体的には、試験のテーマに沿って、教科書で学んだ内容から関連のあるキーワードを自分なりに選択し、論述できているかという観点から評価します。

■「卒業までに身につけてほしい力」との関連

心理実践力を身につけるため、とくに、「根拠に基づく情報発信力」を身につけてほしい。

■参考文献

広瀬幸雄編 『シリーズ21世紀の社会心理学11 環境行動の社会心理学ー環境に向き合う人間のこころと行動』 北大路書房, 2008年

佐古順彦・小西啓史編 『朝倉心理学講座12 環境心理学』 朝倉書店, 2007年

三菱総合研究所 環境・エネルギー研究本部編 『Q & A 環境問題50』 日本経済新聞出版社, 2010年

鈴木浩明著 『快適さを測る』 日本出版サービス, 1999年

遠山益著 『人間環境学』 裳華房, 2001年

日本生理人類学会 居住環境評価研究部会編著 『生理人類学から見た環境の科学』 彰国社, 2000年

楨究著 『環境心理学——環境デザインへのパースペクティブ』 春風社, 2004年

渡辺光雄・高阪謙次編著 『新・住居学 (改訂版)』 ミネルヴァ書房, 2005年